

2015 年 5 月 17 日「エルサレムへの入城」

＜ 聖書箇所 ＞「ヨハネによる福音書 12 章 12 節～22 節」

その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、

「ホサナ、

主の御名によってきたる者に祝福あれ、

イスラエルの王に」。

イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは

「シオンの娘よ、恐れるな。

見よ、あなたの王が

ろばの子に乗っておいでになる」

と書いてあるとおりであった。弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。群衆がイエスを迎えに出たのは、イエスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。そこで、パリサイ人たちは互に言った、「何をしてもむだだった。世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」。

祭で礼拝するために上ってきた人々のうちに、数人のギリシヤ人がいた。彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところにて、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。ピリポはアンデレのところに行ってそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行って伝えた。

＜ 説教抜粋 ＞「エルサレムへの入城」

今日の説教の題名は、「エルサレムへの入城」です。聖書箇所は、ヨハネによる福音書の 12 章 12 節～22 節です。「その翌日、祭にきていた大ぜいの群衆は、イエスがエルサレムにこられると聞いて、しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った。そして叫んだ、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」。

多くの群衆たちは、しゅろの枝を手し、イエス様を迎えに出てきました。聖書の他の箇所では、しゅろの枝をケルビムとともに描いています。つまり、しゅろの枝という言葉には、神殿の光景を想起させる力があります。「主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」。つまり、群衆たちは、イエス様を、イスラエルの王として迎えているのです。

ところで、群衆たちが持っていたイスラエルの王のイメージというものは一体どのようなものであったのでしょうか。イエス様は、エルサレム入城にあたって、磔刑による死という悲壮な覚悟を固めていました。「イエスは、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。それは「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、あなたの王がろばの子に乗っておいでになる」と書いてあるとおりであった。弟子たちは初めにはこのことを悟らなかったが、イエスが栄光を受けられた時に、このことがイエスについて書かれてあり、またそのとおりに、人々がイエスに対してしたのだということを、思い起した。」。

ここには「イエスが栄光を受けられた時」という言葉が書かれています。この、「栄光を受けられた時」というのは何を指しているのでしょうか。一般的には、これは、イエス様の死と復活を指しているようです。一方、統一原理では、イエス様は十字架にかけられるために来られたのではないと主張しています。「また、イエスがラザロを墓から呼び出して、死人の中からよみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした。群衆がイエスを迎えに出たのは、イエスがこのようなしるしを行われたことを、聞いていたからである。そこで、パリサイ人たちは互に言った、「何をしてもむだだった。世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」」。

イエス様によるエルサレム入城の直前、ラザロの復活という出来事がありました。ラザロの復活は、後におとずれるイエスの死と復活の予型として理解できるでしょう。ヨハネによる福音書には、たくさんの象徴が散りばめられています。「祭で礼拝するために上ってきた人々のうちに、数人のギリシヤ人がいた。彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところきて、「君よ、イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。ピリポはアンデレのところに行ってそのことを話し、アンデレとピリポは、イエスのもとに行って伝えた。」。

この祭りは過ぎ越しの祭りのことです。この祭で集まった群衆に、なぜかわかりませんが、数人のギリシヤ人が混じっていました。しかも彼らは、イエス様にお目にかかりたいということです。それを聞いたピリポはアンデレのところに行き、そして、イエス様に伝達されます。

アンデレとピリポがペアで描かれる場面は、ヨハネ福音書には三箇所あります。その最初の記事では、ナタナエルがイエス様を指し、あなたこそ、イスラエルの王であると証言します。ちなみに、ナタナエルはイエス様から、真のイスラエル人と呼ばれます。続いての場面は、ガリラヤの丘の上に集まった群衆に給食する場面です。

ここで、アンデレは、一人の少年をイエス様のもとに連れてくるのです。そして、今日の

聖書箇所になります。ここでは、彼らは、ギリシャ人たち、つまり異邦人をイエス様のもとに連れてくるのです。これらの箇所に象徴されるように、イエス様にしたがう群れは、本来は、真のイスラエルとも言うべき、律法を順守していた人たちでした。

ところが、彼らはイエス様を信頼することができず、その使命はユダヤの群衆のような幼いものに移行したのです。しかし、結局はイエス様の磔死により、その中心は異邦人へと移されることになりました。本来、イエス様は、何を成し遂げたかったのでしょうか。私たちは、イエス様の生涯の意味を再考しなければなりません。